「ほんのわずかな軽蔑」のこの上なく大きな意味
——トーマス・マンの“トニオ・クレーゲル”について更に考える

Greatchain
August 7, 2025

「ほんのわずかな軽蔑」ein klein wenig Verachtung という言葉は、前回に私が訳した最後の３行の中に出てくる。そのさい私は何も言わなかったが、このフレーズは私にとって、この小説の中でも、自分の世界観の中でも、ずっと取りついて離れなかったものである。

なぜそうなのか？「この上ない大きな意味」とはどういうことかを、説明しようと思う。

これはおそらく私だけの考え方、感じ方であって、この小説の一般の読者は、そこまでは考えないだろうと私は思っていた。これは大変失礼な憶測だった。まさかとは思いながら、**ちなみに**この４文字のフレーズをググってみると、驚いたことに、この言葉に対する関心の高さを示す、数ページの解説が、さまざまな解釈と共に現れた。これを書く気になったのは、もっぱらそのためである。

Google で上がってきた解説文を、以下に翻訳して紹介しよう：——

「Ein klein wenig Verachatung とは、ドイツ語で a little bit of contempt あるいは、a touch of
disdain を意味する。**それは軽いがしかし、明瞭な嫌悪または軽蔑を表明し、だがそのことによって、それへの強い拒否も反対も示さない、表現の仕方である。**

「この表現の元になっているトーマス・マンの『トニオ・クレーゲル』のコンテクストでは、この主人公の、あるアンビバレント（両価値的）な態度が暗示されている。すなわち、一方で彼は、通常なるもの、市民的な生活へのある種の憧れを示すが、他方では、そのような俗っぽさのへの、ある種のかすかな軽蔑を感じている。このようなアンビバレントな態度が、この中編小説の中心的テーマである。

「次に引用するのは、いかにこの ein klein wenig Veaachtung が、さまざまに解釈されるかの例である。　　・・・・・・・・

「この表現は、しばしば、一つの隠微だが明らかな軽蔑の形をめぐって、さまざまに利用されている。それは驚嘆とそれへの拒否の間に横たわる一つのニュアンスである。」

・・・・・・・・・・・

実をいうと私は、人生の様々な場面で、この ein klein wenig Verachatung を感じており、この表現が私に、豊かな価値感を与えてきたことに気付いている。

例えば、芥川龍之介の『侏儒の言葉』に「女学生――どこまで行っても清冽な浅瀬」というのがあったと思う。これはあからさまな軽蔑の言葉だが、これをマリア様のような「穢れを知らぬ純粋な少女」と取れば、私にはこれは無限の「あこがれ」の対象であって、軽蔑する気には全くなれない。しかしその奥に「ほんのわずかの軽蔑」があることは否定できない。私は本質的に、そういう矛盾した人間である。言い換えると私は、純粋な「あこがれ」を持つと共に、自分が相手より優れているという**無言の優越感**を感じている。

この無言の優越感の例を一つ示そうか？　それは気を付けさえすればどこにでも転がっている。数週前、NHK のアナウンサーが、ハワイのマウイ島の大火災で、車の金属部分が飴のように溶けて流れ出す場面を映し、かなり長い時間、何も言わなかった。彼はこの無言の作戦によって、カリフォルニアでも、ずっと前から続いている、犯罪行為に対する――怒りや抗議でなく――優越者の「ほんのわずかの軽蔑」を示すことによって、すなわち、これが馬鹿げたタブーになっていることを示しすことによって、彼は勝利した。

私自身について言えば、私は自分を「美しい魂」だと思っており、世間もそのように理解していると思う。しかし私は正しく策略を弄する人間でもある。「陰謀論」という風説は、陰謀の張本人から出たものである。これを「密かに軽蔑する」才覚がなければ、この世界を生きていくことはできない。

「競争社会」などという不健全なものを抜け出すには、どうすればよいか？　これには「人にやさしく」などと教えるより、競争そのものの改革を説くべきであろう。人格者として切磋琢磨する者同士が、不愉快な競争をすることはあり得ない。相手に勝てば気持ちよく、負ければ、見習う相手ができたことを感謝するだけである。「気持ちの良い嫉妬」というものが、そこには存在する。イエス・キリストは、自分が追い越されることを、切望しているはずである。

登場人物「トニオ・クレーゲル」の言葉で、私が最も惹かれるのは、「文士」Literaten と「詩人」Dichter を張り合わせる所である：――「もし少しでも、**文士**から**詩人**をつくりだすことが可能だとしたら、それこそ、こうした私の、生き生きしたものに対する、日常的なものに

対する、市民的な愛なのです。すべての温かさ、すべての善、すべてのユーモアがそこに発する。」

ここでは、「文士」が「詩人」に対して敬意を払いながら、挑戦しようとしていることに意味がある。ゲーテやシェークスピアは、固定した信仰対象のようなものでない。生きた競争相手として競うべき対象だ、ということであろう。

これに関連して思い出すのは、かつての我が国の文部省唱歌「仰げば尊し」である。今、これは歌われなくなったらしい。それはまさか、教師に対する恩を否定しているのではあるまい。理由は主として、古い文語調にあると思われる。しかし批判を受けているのは、「身を立て、名をあげ、やよ励めよ」という古い「立身出世」のくだりではあるまいか？　これは現在の世界情勢を多少なりとも知っている者には、痛烈に響いてくる。かつての立身出世の教えが間違っているとは言わないことにしよう。しかしそれには、「ほんのわずかの軽蔑」という**知恵あるいは皮肉**が伴っていなければならない。現在の混沌として恐ろしい世界情勢の中で生きていくには、この ein klein wenig Verachtung という**無言の知恵**がなければ危険なのである――いわゆる知りすぎた者として危険なのである。